G・H・Qの解散の方針は、この頃から具体化していつた山めではないかと思われる。

この後米國から新來した勞働調査委員團員のマーフイー氏に、吉阪俊藏氏が講演を頼んだので、五月十四日に飯田、水上の兩幹事が委員長のスタンチフイールド氏に會長すると、「協調會の性格についてなお研究の必要があるから、それまでマーフイー氏の出講は留保したい」という返事なので、協調會自体がいよいよ問題となつてることを知つた。

大体以上の情勢は、全く豫期しないところではなかつた。申爲に理事の大改新、新年度計畫の再検討、勞働學校の創立研究等を急ぎ、なお協調會が單なる勞働團体と

みなされないために「協調會の基本的性格」（英文）が書かれた。大体の用意ができたので、五月廿九日余は石井嘱託と同行ヒツクス中尉を訪問したが、同日朝歸米の途についたというので、やむを得ず代理の「ハシワール」氏に會見して説明した。調査課のボツク氏と勞働課のコンスタンチノ氏は滿足して極めて好意ある態度を示されたが、一番大事な協調會問題の主査であつたと思われるヒツクス氏は、恰も歸米の途について會談の機を逸し、しかも次に述べるように代理のハシワール氏によつて、情勢は急轉していつた。

ハシワール氏は、余の説明を一應聽取したまゝで「協調會館の空室を借用したい」と申出られたので、翌日實